

フィヒテ『全知識学の基礎』(1794年) における自己と非自己について

山 根 共 行 Tomoyuki YAMANE

Das Ich und das Nicht-Ich in Fichtes "Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre" (1794)

ABSTRACT

In dieser Abhandlung wird versucht, Hauptgedanken in Fichtes "Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre" (1794) zu interpretieren und dadurch zu prüfen, wie weit Fichte sein Vorhaben, ein einheitliches System von Theorie und Praxis aufzubauen, in dieser Schrift klar und konsequent darzustellen vermag. Im Mittelpunkt unserer Untersuchung stehen folgende Grundsätze: Das Ich setzt sich als bestimmt durch das Nicht-Ich. Das Ich setzt sich als bestimmend das Nicht-Ich. Das Ich und das Nicht-Ich bestimmen sich gegenseitig. Diese drei Grundsätze bilden die Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre. Ihnen werden drei logische Grundsätze vorausgesetzt: Grundsatz der Identität, der Entgegensetzung und des Grundes.

キーワード: フィヒテ、ドイツ観念論、哲学

1 はじめに

フィヒテは『全知識学の基礎』(1794年)において、何を叙述しようとしたのか。また、その意図はどの程度まで、この著作で実現できているのか。本稿

は、フィヒテの著作の読解を通じてこの問題を検討してゆくことを、課題とする。全知識学の基礎をなす3つの命題「自己は、非自己によって規定されたものとして自己を、定置する」「自己は、非自己を規定するものとして自己を、定置する」「自己と非自己は、相互に対向的に規定し合う」のうち、最初の命題は、理論的領域の基本をなし、2つ目の命題は、実践的領域の基本であり、最後の命題は、この両者の総合である。そして、この3つの命題の前提となっているのが、論理的な3つの命題である。これは、「AはAである」「非AはAに等しくない」「Aは部分的に非Aに等しく、部分的に等しくない」であり、それぞれ、同一性、対置、根拠(関連と相違)の命題と呼びうる。この論理的命題と全知識学の3命題の関係を解明することを軸に、論考を進めたい。なお、主要な概念のドイツ語と日本語は以下の通りである。

日本語	ドイツ語
存在	Sein
定置	Setzen
対置	Entgegensetzen
対立	Gegensatz
止揚	Aufheben
制限	Schränken
規定	Bestimmen
自己	Ich
非自己	Nicht-Ich
同一性	Identität
分析	Analyse
総合	Synthese

2 第1部 全知識学の基本命題

2.1 無条件の第1基本命題 あるいは同一性の命題

AはAである。この論理的同一性の基本命題と峻別されるべき命題がある。それは、Aが在る、という存在に関わる命題である。命題「AはAである」は、フィヒテによると、「もしもAが在るならば、そのときAは在る」と言い換えることができる。そして、この「もしもAが在るならば、そのときAは在る」で注目すべきは、つぎの2つの点である。まず、この命題では、Aそのものの内容が問われていない点だ。Aがいったい何であるのか、はこの際問にならない。つまりAの内容は問題とならず、いかなる内容をAが持とうとも、この命題は生きている。AはAである。つぎに、もしも、と、そのとき、の間に「必然的な関連」が定置されている。この両者の間の関連は、Aそのものの中味を問う「内容」に対し「形式」と考えられる。Aがいかなる内容を持とうとも、「もしも」のAと「そのとき」のAとの間の関連、すなわち形式がここでは問われている。Aの内容が何であれ、AはAである。AはAに等しい。Aは自己と同一である。あえていうならば、「もしもAが在るならば、そのときAは無い」という別の否定を含む命題を考えると、この仮定の場合、「もしも」と「そのとき」の間の「必然的な関連」は打ち破られ、形式上、破綻していることになる。

フィヒテの論述に戻ってこれを追うならば、つぎのような展開が見られる。まず、命題「AはAである」は命題「Aが在る」から峻別されねばならない。同一性の命題「AはAである」からは、Aの存在を問う「はたしてAは在るか」は導出されえない。そこで、あらためてフィヒテは問いかける、「いかなる条件のもとに」Aは在るのか、と。この問いをめぐる考察の中で、「自己」が登場し中心的役割を果たすことになる。

まず、上記のAとAとの必然的な関連について、「これは、自己のなかに、自己を通して、定置されている」とフィヒテはいう。その理由として、先ほどの命題「もしもAが在るならば、そのときAが在る」は、他ならぬ「自己」に

よる判断だからだ、という。まず、「もしも」と「そのとき」の間の同一性という必然的な連関は、いかなる根拠もなくして無条件的に提示されている。だから、それは自己を通じて自己に与えられていなければならない。それ以外の場合は、想定できないのだ。同様の事柄を、フィヒテは、Aそのものについても、述べている。すなわち、Aそのものも、自己のなかに、自己を通じて定置されている。それ以外の場合は想定できない。以上をまとめてみると、同一性命題「AはAである」は、他ならぬ自己のなす判断ゆえ、Aそのものも、AとAの関連も、両者ともに、自己を通じて自己の中で定置されていることになる。ここにおいてすでに、まだ明確ではないが、「定置」の「存在」に対する優位性を感じとることができよう。

「いかなる条件のもとに」「Aは在る」のか。この問いに関する考察を続けよう。フィヒテは言う。自己は自己である。AはAである。この2つの命題を挙げて、その相違に注目し、一般的なAに比べて自己の特殊性を指摘する。自己は自己である。この命題は、無条件にあらゆる根拠がなくても妥当する、という。一方、AはAである、の方は、そもそも、Aが在るのかどうか、未確定である、という。自己はそもそもその内容が自己同一性に他ならないので、それゆえ、自己は自己、という同一性の命題は、自己が在る、との命題に置き換えることができる、とフィヒテは考えているように見える。しかしここでの展開はまだまだ不十分だと言わざるをえない。なぜなら、自己の自己定置の行為と自己の存在との関連がまだ十分に展開されず、むしろ、この両者の、今後検討されるべき関連が、ここでは、暗黙のうちに前提されているように見えるからだ。

フィヒテ自身、経験的なレベルでの考察に若干言及した後、先験的な純粋なレベルでの本来的考察へもう一度焦点を絞りを直している。つまり、上記の考察の際、問題となっている「判断」はすべて、人間の精神の為す経験的な行為であり、また、この行為の基礎には特定の純粋な性格の活動が横たわっている、という。自己の自己自身による定置は、自己のこの純粋な活動である。自己は自己自身を定置し、この定置ゆえに、自己は在る。そして、これと同時にこの逆も妥当する。すなわち、自己は在る、そして、この存在ゆえに、自己は自ら

を定置する。存在は、活動の結果であり、定置は活動そのものである。自己は存在する、これは、この活動、すなわちフィヒテ独自の用語である事行(タートハンドルング)の別の表現に他ならない。そして、この事柄こそまさに全知識学がはじめて示しうるところの結果なのだ。「自己は根源的に根拠なく自己自身の存在を定置する」。

2.2 内容的条件づきの第2基本命題 あるいは対置の命題

非AはAに等しくない。この第2基本命題は第1基本命題からは導出されえない。同一性の第1基本命題からは、非Aは非Aである、が導かれうるのみであるからだ。第2基本命題にあっては、まず、非Aそのものは、根拠なく定置される。また、対置そのものも、上記の事行と同じく、自己そのものによって定置され、これ以外に何ら根拠を持たない。さらに、対置という活動は、定置との関連の中でのみ、意味をもつ。Aの定置を前提に、さらにこれとの関連の中ではじめて、非Aの対置が可能になる。この意味で、対置は内容的に条件づけられている。対置の「対」は、Aとこれに対する非Aの、内容的な相違を意味する。しかも、たんなる相違一般ではなくて、まさに対置という相違である。この内容的な相違が、そもそも、両者の関係を、対置の関係として性格づけるのである。かりに、左辺も右辺も、どちらにも、同じAが定置されているならば、両者は同一性の記号(=)で結ばれ、 $A=A$ となり、対置は生じえない。Aの定置なくして非Aの対置はありえない。非Aを内容と形式の両者の観点から観察すると、非Aは、内容的には、Aでないものであり、この限りにおいて、Aそのものによって規定されている。また、形式的には、非Aの非は、対置という活動そのものの産物であり、これ以外に根拠を持たない。根源的に定置されるのは自己のみである。だから、対置も、自己に対する対置が根源的なものとなる。自己に対する対置の産物は、非自己に他ならない。非自己が自己に対置される。これが第2基本命題である。(論理的な対置の命題は、Aは非Aではない、という表現になる。)

2.3 形式的に条件づけられた第3命題 あるいは根拠(関連と相違)の命題

「非自己が定置されるかぎり、自己は定置されない。なぜなら、非自己によって自己は完全に止揚されるからだ。」ここではじめて、フィヒテにおける止揚概念が登場する。すでに、定置と存在、定置と対置は不十分ながら、その基本的性格は考察され、そしてここではじめて、止揚が言及される。止揚とは何か。フィヒテの論述はつぎのように展開する。非自己は自己に対して対置されている。非自己が定置されているかぎり、自己は定置されえない。この状態を、フィヒテは、自己が止揚されている、という。つまり、止揚は、存在の否定形をここでは意味している。しかし、対置はある意味で定置を前提とする。対置される非自己は、定置されるべき自己に対してはじめて対置されうる。だから、この両者、すなわち自己の定置と非自己の対置、が相互に止揚しあうことになる。ある種のせめぎ合いが起こる。それゆえ、ここから、つぎのような要請が生まれてくる。自己の定置と非自己の対置との相互的な止揚からは、定置と対置の基盤となる「意識の同一性」、「我々の学問の唯一絶対的な基盤」である「意識の同一性」が、崩壊することになる。だから、これを避ける道が必要となるのである。このような要請に対しフィヒテは、この道を、「制限」という新しい概念に求める。Aと非A、存在と非存在、現実性と否定性、これらの対概念の片方が、一方的に止揚され否定されることのない、いわば対概念における左右両者の共存の道を探ることになる。共倒れ(意識の統一性の崩壊)でもなく、一方的な止揚でもない、両者の新しい形での共存を計ろうとする。

フィヒテの構想では、この止揚に代わる概念は、制限以外には考えられないという。対立する2つのものの相互的な制限、これが、フィヒテの提案である。Aと非Aが相互に制限し合うことによって、Aか、それとも非Aという、対立的選択、つまり、Aならば、非Aではなく、また、非Aならば、Aではない、という形の二者択一的選択が避けうると考えられている。ここに提唱されている相互的制限の概念の核をなすのが、可分性である。Aも、非Aも、ともに可分的と捉える道だ。可分性は、絶対的な総体性との関連で考えうる概念である。つまり、絶対的な総体性そのものは、まず、非可分的と考えることができるの

であり、その限りでは、ここでの可分性は、この総体性の否定形と捉えることができる。つまり、ここでは、Aも非Aも、ともに、部分的に止揚され、部分的に止揚されないことが可能になる。Aも非Aも、ともに、両者の間の対置関係を可能にしたまま、部分的に定置され、部分的に止揚される。こうして対置関係にある両者あるいは対立は統一されうる。以上見てきた展開の現時点での結論は、つぎのようにまとめることができるだろう。フィヒテによれば、「自己は、自己のうちに、可分的な自己に対し、可分的な非自己を、対置させる」。そしてこの結論を、抽象化し一般化すると、根拠の基本命題が得られる。すなわち、「Aは部分的に非Aに等しい」、これが第3の基本命題、根拠の命題である。自己と非自己、この両者は、部分的に、ある観点で、等しく、また、別の観点で、等しくない。自己と非自己は、全面的に、相互的に排除するのではなく、相互に、部分的に、対応し合う関係にある。これが可能なのは、自己も非自己も、それぞれを、絶対的非可分的な総体と捉えるのではなく、まさに相互的に制限された可分的な存在として捉えることができるからだ。ここにおいては、一方の関連の根拠と、他方の相違の根拠を、根拠の基本命題の2種として挙げることができる。対置させられたAと非Aは、ある観点で相互に同じであり、ある別の観点で相違するのだ。前者の観点を、関連の根拠と呼び、後者の観点を相違の観点と呼ぶ。

3 第2部 理論的知の基礎

3.1 分析すべき総合的命題の規定

これまでの展開のひとつの到達点は、つぎの命題にまとめられる。すなわち、自己と非自己、この両者は、自己によって、自己において、定置され、しかも、互いに対向的に制限し合うものとして、定置されている。フィヒテはこの命題のより詳細な考察を、この新しい章で始める。一方で、自己は、自己によって制限されたものとしての非自己を、定置する。しかし、この命題においては、非自己がいまだ確定されておらず、現実性を確保するに至っていないゆえに、

命題全体として、使用できない、という。これに比べ、他方では、自己は、非自己によって制限されたものとして自己を、定置する。後者の命題は、すでに、使用可能だという。そして、この両者の命題、すなわち、まず、自己は、非自己によって制限されたものとして自己を、定置する、そしてつぎに、自己は、自己によって制限されたものとして非自己を、定置する、という命題、この両者をフィヒテは、つぎのように特徴づける。すなわち、前者が、知識学の理論部分の根幹をなし、後者は、知識学の実践部分の根本を形成する、という。さらに、両者の関係は、実践的な命題が、理論的な命題を根拠づけるのであって、その反対、すなわち、理論命題が実践命題を根拠づけるのではないと主張する。この両者の関係は、実は、「全知識学の基礎」全体に関わる問題提起なのである。少なくとも、フィヒテ自身の構想によると、実践的命題が理論的命題に対し、優先権を与えられていて、この実践命題が理論命題を根拠づけることになる、という。

3.2 提示された命題に含まれる対立の総合

ここで、理論的命題の分析に移る。「自己は、非自己によって規定されたものとして自己を、定置する。」この命題において、自己は、まず、規定するのではなく、規定されるのだ。規定するのは、自己でなく非自己である。非自己が自己を規定する。非自己が自己を規定する、とは、非自己が自己の現実性を制限することに他ならない。このかぎりでは、非自己が能動的であり、自己は受動的な役割を担うこととなる。しかし、本来すべての能動的な行為は、自己によるものであり、自己も非自己もじつは自己によって定置されたものだ。だから、自己が、規定されたものとして自らを定置する、とは、自己が自己自身を規定することに、他ならない。こうして、ここで、はたして自己は、能動的であるのか、受動的であるのか、という問題が提起され、そしてある種の「矛盾」概念が指摘されている。しかし、矛盾の全面的な展開はここではまだ行われない。その代わりに、ごく一般的に、つぎの点が指摘されている。すなわち、2つの命題が相互に矛盾するとき、この矛盾する2つの命題はそれぞれが自らを止揚する、と。そして、すでに見たように、フィヒテの場合、止揚は、おお

むね否定あるいは廃棄あるいは廃止の意味で使用されている。そこには、高揚あるいは変形保存のいわば肯定的なニュアンスは見られない。

フィヒテによる問題の解決の糸口は、止揚に代わる概念の提唱にある。それは、統一である。止揚ではなく、対置されたもの、対立物の統一をフィヒテは提唱する。そして、この統一は制限あるいは規定を通じてなされる、という。

自己は自己自身を規定する。この規定は、上記の論理的第1命題に基づいて、現実性のすべてがこの自己に帰せられることに他ならない。現実性の総体は絶対的に自己に帰する。そして、自己に対置する非自己には、現実性に対置する否定性が当然ながら帰する。この両者、すなわち、自己における現実性の絶対的総体と、非自己における否定性の絶対的総体、が規定されることを通じて、止揚ではなく、統一されなければならない。しかし、いかにしてこの統一は可能か。自己が規定される、自己が規定を受ける、とは、自己における現実性の総体が、その部分において、止揚されることに他ならない。現実性の総体が失われることはないものの、現実性のある部分が止揚される。この止揚された部分的現実性は、ただ消滅するのではなく、自己に対置する非自己において、定置される。つまり、自己が規定を受けることにより、その結果、自己において定置されていた現実性のある部分が、非自己の側において定置されることになる。この現実性のある部分、あるいは否定性のある部分を、度(グラート)と呼ぶことができる。自己は、現実性のある部分を非自己において定置すると同時に、同じ部分を否定性として自己自身において定置することになる。この結果は、別の言葉で表現すると、自己は、規定を受けることにより、自己自身を、自己規定するもの、として定置する、ことになる。こうして、自己の能動性と受動性の二者択一的问题是、解決される。すなわち、規定を受ける自己の受動性は、同時に、自己自身を、自己規定する能動性として把握することと、矛盾なく、両立するのである。この箇所での展開をまとめると、現実性の総体そのものは、いまだ規定性に達せず、現実性の総体そのものとしての自己は、無規定な状態にとどまり、そして、規定されること、あるいは自己自身を規定する、とは自己の現実性のある部分を他者において定置し、同時に自己においてその相当部分を否定性として定置することには他ならない。このかぎりでは、規定とは

フィヒテ『全知識学の基礎』(1794年)における自己と非自己について(山根)

制限を意味し、制限は、部分的な現実性と部分的な否定性の総合だといえよう。また、自己の規定は、同時に、非自己の規定をもたらすゆえ、両者の相互的な規定が、結果として生じていることになり、この規定は、相互的な性格をもち、相互規定と呼ぶことができる。

3.3 対置された2つの命題の最初の命題に含まれる対立の、相互規定による総合

現実性の根源は何か。すべての現実性の源は自己に求められる。自己の定置により、現実性が生じる。「自己は、自己自身を定置するがゆえに、在る。」また、「自己は、在るがゆえに、自己自身を定置する。」「こうして、自己自身の定置と自己の存在は、同一である。」自己定置は能動的な活動であり、すべての現実性は、能動性である。また、逆に、すべての能動性は現実性である。ここに述べられたかぎりでのフィヒテの「現実性」理解は、自己の能動的活動を基礎にしている。そして、自己定置と自己存在の同一性の構想は、「在る」存在と、その否定形「無い」の非存在の対置から「現実性」を把握する道を認めている。すなわち、現実性とは、ある何かの存在を意味する。しかし、「現実性」概念は、別の意味での理解をも認める可能性を持つ。すなわち、制限としての規定を考察した際に確認できる、現実性と否定性の相互規定は、他ならぬ「内容」の有無、ある何かの「内容」あるいは「本質」と同義語として理解されうる。つまり、「現実性」を、存在に近づけて理解するのか、あるいは本質に近づけて理解できるのか。ここでは、二者択一的な、決定的な判断はできない。むしろ、両者の理解が可能であると、考えられる。

能動的な活動に対置させられるのが、受動(ライデン)である。受苦とも訳せる言葉だが、ここでは、受動と言う方が適切だろう。受動は、能動の否定形である。さらに、能動性は、因果関係において、原因として捉えられ、受動性は、その結果として現れる。原因と結果の関係は、能動受動の関係の、因果関係における表現である。

3.4 対置された2つの命題の第2番目の命題に含まれる対立の、相互規定による総合

非受動はすべて能動である。それゆえ、受動は、能動との関係においてのみ規定されうる。しかしこの規定は、現実性と否定性の関連根拠に他ならない。そしてこの関連根拠は、現実性と否定性の量的関係である。この関係において、受動は、能動の対置的量(クヴァントゥーム)と呼べる。「自己は考える」。この文において、現実性と否定性の相互関係、能動と受動の関係を検討してみよう。この考えることは、ひとつの能動である。自己は、考えるもの行動するものとして定置される。その考える自己の存在は、いくつかの規定をもっている。考えることだけでなく、その他の行動も、本来、存在に帰する。その中のひとつの行動、すなわち考える、だけを取り出し、述語として主語の自己に関連づけるならば、それは、ひとつの選択であり、同時に他の多くの可能性の排除ないしは非選択に他ならない。そしてこの非選択ないしは排除は、フィヒテの文脈と用語では、受動と呼ばれているものと同じであり、上記で紹介された制限に他ならない。つまりここでは、主語と述語の一般的な性格が明らかにされている。主語そのものは、あるものの全体性を表現し、述語はこれに対し、特殊性を意味する。主語の位置に置かれた「自己」そのものは、あらゆる能動性の総体の表現であり、ある特定の述語と関連づけられるまでは、総体のままにとどまる。

しかし、一般的に、ある言語表現で、あるひとつの述語が定置されるとき、そのときその主語は、制限を受ける。ある述語の選択は他の述語の非選択を意味し、無制限の主語を制限することになる。ここで検討された命題「自己は在る」は、すでに論理的同一性の第1命題の「自己は自己である」との関連で一度検討されているが、そこで確認された「定置」の「存在」に対する優位性の問題を思い出すならば、ここで述べられている、主語そのものの性格づけは、別の局面から関心と呼ぶ内容をもつ。すなわち、定置され、存在しつつある自己の総体性、フィヒテの言葉では「現実性の絶対的な総体性」として主語「自己」を見直すならば、自己定置する能動体としての自己の、定置の後の結果と

フィヒテ『全知識学の基礎』(1794年)における自己と非自己について(山根)

しての自己が、文法的に「主語」の位置に在り、「術語」はあらゆる可能性の場所を意味する。そして、特定の述語が選ばれ、「主語+コブラ+述語」でもってひとつの文が完成するとき、この特定の述語をそなえた主語の特殊的な「定置」が完成する。すなわち、「存在」は定置の結果であり、一般性の表現であるとともに、特殊な「定置」の前提と見なすことができるのだ。フィヒテ自身の考察も、ほぼ同様の事柄を述べていると考えることができる。すなわち、自己は、規定し、規定される、とフィヒテはいう。自己は能動的に規定し、かつ受動的に規定を受ける。まず、能動的に、自己自身を規定するとき、自己は、総体性に含まれるあらゆる現実性の中から、「自発性」(シュボンタネイテート)に基づきある特定の現実性を定置する、という。そして、その結果は、能動的な自発性の発揮による自己定置のプロセスをいったん捨象すると、受動的に、自己が規定されたものとして把握されるのである。自己は、自己を規定し、かつ同時に規定される。この命題の内容がここで基本的に解明されたことになる。(未完)

4 おわりに

なおフィヒテのテキストはつぎのマイナー版を使用した。

Fichte, Johann Gottlieb : Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre : als Handschrift für seine Zuhörer (1794) / Johann Gottlieb Fichte. Einl. und Reg. von Wilhelm G. Jacobs. -4. Aufl. - Hamburg : Meiner, 1997